

阿呆自轉車

福田鼠

福田 鼠

犬も歩けば棒に当たる。僕は歩いてみたけど案外何にも当たらない。できるんなら、綺麗な女の人に当たりたかった。

犬と違って僕が歩くには右に行くにも左に行くにも何ぞ理由がある。理由とは何かしらんと思ひ、友人に聞いたら目的だの、メリットだのという。じゃあ、そういうものが無かったら阿呆なのかと長いこと信じていたが、ホームレスにも明日の飯なり、今夜の寝床なりと理由がある。麻雀に先付け、後付けなんて言葉があつて、役を後から付けても良いかどうかというルール設定なんだが、今の世の中後付け有りだ。ついでに喰いタン有りのアリアリだ。言葉に矛盾はあるが、今の世の中、今風のルールがきちんと適用されている。今風の世間で生きた僕は今日もアリアリで麻雀を打つ。

阿呆になるのは難しい。

それじゃ、ウマシカさんはいかがでしょう、お安くしておきますよ。おたくの在籍していらっしゃる大学でも良く売れている人気商品ですよ。

いえ、あたしゃ阿呆がよろしい。

いや、別に自ら阿呆になるつもりも無いんだけど、どうも理由だの何だの、そういうのが嫌になっちゃったわけで。同級生は、順当に行けば今年大学を卒業、僕は長々とアカデミックな空気に身を浸けねばならぬ、いえ、マスター、ドクトルなどと大それたものじゃないんですよ。『青少年期におけるピースの喫煙と発ガン率』たる研究のモルモットになるためには、公園で日々ゆっくりとピースを吸い、陽が落ちたら部屋でジャズなんかをかけて珈琲かウイスキーでやはりピースを吸わねばならないんです。残念なことに途中でお金が無くなってゴールデンバットという伝統ある安い両切り煙草に乗換えてしまったのだが、まあ、両切りならばピースに負けず劣らず体を蝕むというので許容範囲内だそう。

大学三年目の時、突然、目が覚めたように自分の将来の暗さに気が付く。暗さ？ 別に暗いものか、大学に行かなくなつて一生懸命働いている人間はたくさんいるじゃないか。不況がどうのと言つたつて働けば働ける。働きさえすりゃ、人間、とりあえずの存在価値、社会における有用性たるものを獲得できる。社会という大きなやつを味方に付けれる。

そうと決まれば、早速、大学なんて辞めちまおう。おいおい、泣かないでくれよ。一生懸命働いてみるからさ。面倒だ、東京で暮らそう。そうだ、きっと良いことがある。僕の人生に役立つような何かが。金を貯めて東京に行こう。

半年間働いてみたら、人間に必要なのは有用性じゃなく、安心感だと気付いた。捨てるものは捨ておきなさい。学歴だって、もう少し手を伸ばせば捨てるじゃないの。

さあ、四年目にして、一年生の始まりだ。

ドラえもんがいなくてもタイムマシンに乗れてしまった。

「カッとなってやった反省はしてない」

結構なことだ。反省なんてするものじゃない。それより明日だ。昨日のことはどうにもならない。反省に三分、三十分、三時間、三週間、三年間、桃と栗が育ちまって柿の実が落ちて蟹に命中するまで待ってみてもどうにもなりゃせんさ。これまでの結果は良いことだったか、悪いことだったか、二択で時々眺めるだけで、明日は良く生きよう、それで良い。明日がある人間であれば。

僕はカッとならなくても、何もしなくたって、周りの人が大いに泣いてしまった。何もしなかったからだろうか。だって、僕は人を殴りもしてないし、マリファナも、セックスすら一度もやってない。潔白だ。純白だ。いや、気付いて無いだけで多分何かやらかしたんだろう。ドッペルゲンガーの仕業かもしれない。

僕の罪には法律では罰は与えられなかった。周りも許してくれた。明日からは良く生きようじゃないか。

しかし、右に行くにも左に行くにも理由がある。僕には理由が見えない。

後付け有りだ、さあ、走ろう。

ある男は日本をぐるりとまわった。日本をまわると何か良いことがあるのか。

半年前に自転車を買った。東京に行くのを辞めてお金が余っていた。それでも、半年間一生懸命貯めた金だから、夢を見て貯めた金だから、失敗したとしても何か形に残しておきたかった。本当はバイクを買いたかったけど、免許だの保険だの何だのと無理だった。原付じゃ駄目だ。僕に必要だったのは、半年間の休学、言うなれば『自分が踏み外した記念』だ。それで、買ったのが自転車。赤茶色のロードレーサー。その気になればレースにも出れる。二十万円也。残りの二十万円は何に使ったのか忘れたけど、とにかく『踏み外した記念』に踏み外したようなものを一つ買えた。

それで、半年間は片道一時間も大学に向けて自転車をこいだ。もう、友達もどこかに行っちゃまう。僕は一人きりでこれから三年か四年か知らないが長いこと大学に行かねばならない。

毎日自転車をこいでいて、時々、雨が降ったら電車に乗った。電車にはいろんな人が乗っている。女子高生もたくさんいる。何故、彼女たちはそんなにセックスアピールに必死なのだろう、僕は彼女たちの太腿を眺める度に考える。おい、あまりこっちに寄るな、痴漢と間違えられるだろう。彼女たちの持っているカバン、服、全て、僕の着ている、持っている何か、そいつらと同じ素材でできている。僕はなぜ彼女たちのセックスアピールに尻尾を振って走ってってしまうのだろうか。彼女たちの髪からは昨日おかの買ってきた資生堂の整髪料の良いにおいがする。良いにおいだから、僕も今朝しっかり振りかけてきた。彼女たちは僕の髪のおいにおいに反応して近付いて来るのか。

おい、お巡りが走っているよ。見ろ、田んぼの向こうの、おい、逆だ、携帯で絵文字探している場合じゃねえだろ。

ああ、電車の中は臭い。

自転車に乗っているときは、何を考えているんだろう。自分でも分からない。とにかく車にひかれないように、できるだけ速く、膝を痛めないように、とにかくこぐ。きっと何かしらもっと大事なことを考えている気がする。僕は決してレースに出るわけでも無い。ツール・ド・フランスに出れるわけでも無いし、実業団なんかも当然考えていない。ただの記念だ。踏み外し記念。自転車のために生きているわけじゃない。つまり、きっと何かを考えている。何をどう考えていたのか忘れたけど、留年しなくたって誰でも一人きりで生きていかなくちゃいけないってことが何となく分かった。電車みたいにくさくて都合の良い乗り物は人生には無いんだよ。

へこたれちまうよ。何だかとても厳しいみたいじゃないか。実際はとても普通のことでも、そんなのをいきなり自転車の上でトラックの排気ガスを吸いながら、頭にガツンとぶつけられちゃ

何だその目は、そっちが近付いてきたくせに。ほら、さっさとあっち行け。

どうやら、僕はもう終点に着いてしまっているらしい。それも随分前に。だが、ずっと気付かなかった。何せその列車は何両つないであるんだか分からないが、とにかく長い。時々、連結器を渡って誰かが来る。だが、大抵は一人だ。一両に一人、ぽつんと座って列車に乗っている。どこに向かっているのかしらん。車掌は多分一番後ろにいるんだろうが、一体どれだけ歩けば一番後ろにたどりつくのか。時々、駅に止まる。人のいる駅もあれば、誰もいない駅もある。未来的な大都会の場合もあるし、駅なのか分からないような平原に石が一つだけ、確かその石には『ほ

っこり山』と書いてあった。とにかく、自分はどこにいるのか、進んでいる方が自分の行きたい方向なのかも分からない。そのくせ、僕はうんうん客車で何かしている。停車時間も決まっていない。半日くらい、いや、分からない。列車からじゃ時間感覚も何も分からない。

どうも、終点と車庫を往復しているだけで、どこにも進んじやいない。

お客様の乗ってきました汽車は回送となります。人は乗れません。いえ、乗ったままでも構いませんが、車庫に戻るだけであります。

確信は無いが、そう思うんだからそうに違いない。車庫に行って、また終点に戻ってはまた車庫に。僕が降りるまでずっと続ける気らしい。律儀な列車だ。しかし、終点の駅というのは実に寂しい。本当の列車みたいに終点だから町というわけでもない。確かにレールは少なくとも十本くらい見えるし、それぞれにホームもある。ホームからホームに移るための歩道橋もある。だが、人もいなければ、他の汽車も全く見えない。駅の外は高い木の塀のせいで何も見えない。それで、汽車から降りるのもどうかと思う。終点から車庫までの道は、僕がこれまで来た道と同じ景色なのだ。恐らく隣に伸びるレールが僕の来た道であろう。時間感覚は相変わらず分からないが、だいたい二十分ほどだろうか、レールは並行して延びた。分岐がありしばらく寂しく走る。周りは冷たそうな石で敷き詰められている。また二十分ほどで別のレールが集まり始める。ただし、列車はいない。ゴツゴツした石が敷き詰められたその場所が車庫らしい。列車は止まり、またしばらくしたら終点の駅に向けて出発する。

乗り換えねば僕は先には進めない。

別に呆然としていたって構わない。この列車は進まないかもしれないが快適だ。何せ僕はこれまでずっとこの列車に乗って生きて来た。

いつから車庫と終点の繰り返しを始めていたのか分からない。どうして分からなかったのかも分からない。

夕方に起きると、飼っていた蟻が一匹残らず死んでいた。埋めてやろうか、捨ててしまおうか迷ったが、どちらにせよ同じだと気付いた。自分も死ねばそういう風に扱われる。生を失い、物として扱われる。

夏休みに入った最初の瞬間、つまり前期の最後のテストが終わった帰りに蟻の水槽を買ってきた。半透明の緑色のジェル状の固体が入っていて、それが蟻の食料になり、地面の代わりに巣を掘っていく。半透明だから巣穴が全て見える。NASA開発だと。無重力で蟻がどう巣を掘り進めようとか関係ないだろ。そんなことより、核弾頭積んだあの物騒な衛星を安全に処理する方法でも考えてくれよ。人間が安全だったら蟻が全滅したって構わないからさ。

テストの鬱憤晴らしなのか、いや、大学というものに対しての憤りのためなのか、いつもの通り別段理由も無いのか。何にせよ、その浪費は自分のくたびれた心を癒してくれた。神社に行って、でかい蟻を七匹集めた。神社は蟻も馬鹿でかい代わりに、蚊も馬鹿でかい。三十分かけて、三十箇所以上かまれて家に持ち帰った。アリセブンと名付けて、友達のとんち君に一眼レフカメラを借りて写真を撮って、ホームページまで開いてやったのに全く巣を掘らなかった。仕方が無いから元の巣穴のところまで行って、

「解散っ」

と掛け声かけてやったが、今度はなかなか出てこない。それでまた馬鹿でかい蚊に噛まれながら、戻してやった。

その帰りに近所の公園にいた小さな蟻を、今度は小さい蚊に噛まれながら二十匹ほど捕まえた。次の日には穴を掘り始めていた。

夏休みには旅行に行こうと思っていたが、どうしても機会が掴めなかった。どこぞ行ってみたい場所もあるようで無い。

死んだ蟻たちを残った緑のジェルと一緒にマンションの下の花壇に埋めてやった。九月に入る前なのにもう暑苦しくない。ちょっと蒸し蒸しもするが、今年は涼しいのが早い。過ごしやすい夏を緑色の得体のしれない物体の中で過ごした蟻たちはいつか僕を噛み殺しに来るだろうか。

全滅した蟻たちがいなくなった空の水槽を眺めながらピースを吸っていたら、どこでも良いから出発してみようと思った。小学生たちは来週には新学期だ。

しかし、金が無い。分かりながらも通帳を持って銀行に行った。ATMは時間ぎりぎり開いていた。五六三円しかなかった。せっかく来たものだから、五百円、つまりは全財産を下ろし、それで帰りにピースと缶コーヒーを買い、公園の作り物のリスにまたがって三十分ほど考えた。

一年前と何が変わったのだろうか。去年は東京に出ようと思っていた。それで、せっせと金を集めた結果、中古のバイクが一台買えるような自転車を買ったのだ。

その自転車で東京まで行けるだろうか。その想像は自分をほんの少し元気付けた。同時に、そんなことをしたって何もなりゃしない。そんなことをするやつは阿呆だと思う。しかし、どうしてだか元気が出る。

給料が入って、さらに親に金を借りた。わけを話したら親は事故に気をつけるようにだけ言い、頼んだよりも一万円多く貸してくれた。何を言ったって無駄な息子には、愛を注いでやるしかない。一万円の愛なら安いものだ。おかげでテントと寝袋が買えた。

九月に入った晩に、蟻の水槽をビニールで二重に閉め、ゴミ箱に放り込んだ。

目が覚めて、僕は自転車で東京に向かった。

寂しいもんだから土竜君を出発の前日の夜に誘った。案の定、断られた。代わりに一眼レフを貸してくれると言う。そんなもの邪魔っ気だし、壊れたら困る。じゃあ、何か役に立つものごと、探してみたけど無かったよ。いや、荷物が多いと困るからいらぬよ。それじゃ、出発前に飯をおごってあげよう。あ、財布の中に金が無い。

なぜだか、土竜君、火葬場のある山のトンネルの隣のゲームセンターに連れて行ってくれた。窓ガラスに何ぞ黒いシートか布で内側から隠しがあって怖い。開いているのかどうかも分からない。

「一回来てみたかったんだよね」

「いや、明日の朝出発だから今日は早く寝たいんだけど」

「旅の前にはホームタウンをしっかりと焼き付けとくものだよ」

入ってみると、我らの町のロクでも無い人間の代表たちが集まっていた。もはや、ヤンキーすらいない。もっとロクでも無い。彼らは何者なのか、僕には分からない。おばさんに、おっさん

、とにかく一人残らず活力たるものが一切無い。目が死んでいるとういやつだ。そのくせ入っているゲーム機は意外と最近のもので風情もクソも無い。代わりに推定年齢二十歳以上の見たことも無いような自販機があって、うどん、ラーメンというボタンが一つずつだけ付いている。二百円。

「出発祝いに買ってあげるわ」

金を入れて、うどんのボタンを押すと『15』と赤いアナログな数字が出て、静かにカウントダウンが始まった。中で何が起きているのか全く分からないままに淡々と『0』になり、ビーと音がして、また沈黙した。取り出し口を開けたら学祭か何かで売ってそうなうどんが湯気をたてて待っていた。油揚げまでのっている。土竜君はまた金を入れて、今度はラーメンを押した。やはり同じように、白いカップに入ったラーメンが出てきた。今度はナルトが入っている。

恐る恐る食ってみると味が無い。仕方が無いから、テーブルの上にある『七味』と書かれたパックの粉を入れたら、うどんの味になった。ラーメンには『コショウ』というパックが用意されていた。

食っていたら、スーツの男が入ってきた。間違いなく場違い。だが、よく見たらしわしわよれよれのスーツで、胸にバッジが付いていた。タクシーの運ちゃん。ノット場違い。

東京まで残り何キロだ。国道のくせにえらく狭いし、トラックはビュンビュン過ぎて行くし、阿呆みたいに暑いし。

寝過ごしたせいで今日はあまり進めないかもしれない。いや、寝過ごさなくても東京なんて行けるのか。車で高速を使えば休憩しながら行くとして十二時間ほどだそう。車が平均百キロ、チャリが平均二十キロ弱。つまり、五倍の六十時間。一日八時間の約一週間。一週間も自転車かこげるか。

でも、進んでいるってことは進んでいるんだろう。蟻の穴から堤の崩れ。

ああ、うどんが食いたい。土竜君、僕は今こそゲームセンターのうどんが食いたいよ。

夕暮れ前の河原で山高帽子君はせっせとBBQの準備をしていた。女の子たちが買出しから帰ってきた頃には、山高帽子君は赤々と燃える炭火の前で煙草を吸っていなければいけない。

「すごーい、本当にもうできあがってる、さすが山高くん（ハート）」

バチコーンッとウィンク投げてウハウハ、そういう手筈だが、火はなかなか付かない。高校の頃、ゲッパ君が火を付けているのを見たときには簡単そうに見えたが、なかなか付かない。

「おい、火ってなかなか付かないもんだな」

ゴールキーパーが山高くんに言う。

「いや、簡単に付くはずだって、ハゲの出っ歯のやつでも簡単に付けてたんだから」

山高君、笑いながら答えるが炭が鼻の頭について汗は止まらない。

山高君の携帯が鳴る。山高君、携帯どころではない。携帯電話にはゲッパと表示されている。炭はなかなか付かない。

ああ、参った。つながらない。思ったより進めたから一日目ぐらい野宿じゃなくて山高帽子の

家に泊まりたかった。明石海峡大橋の下に公園があるらしい。明石海峡が綺麗だろう。海風でテントが飛ばないかしら。

とにかく水だ。コンビニで買った百円一リットルの麦茶だ。水と電解質さえ取ってりゃコレラにかかっても生存できる可能性がある。水さえあればフェータルな事態には陥らない。でも、腹が減って仕方が無い。肉が食いたい。安い肉屋。できれば御飯が山盛りでもらえれば。

山高君、疲れ果てた。もうじき女の子も帰ってくる。何か良い方法は無いか。いや、疲れているには良い考えも浮かばない。とにかく水を飲もう。それで、カバンの中にある携帯電話が光っているのに気付いた。

『着信 ゲッパ』

「もしもし、火が付かないんだけど」

「は？ 火？ というか、泊まらせてくれ」

「は？ こっちにいるの？ いや、今BBQ中なんだよ」

「は？ BBQ？ こっちは東京までチャリこいでるんだよ」

「は？ チャリ？」

「そうだよ。BBQ後でも何でも良いから屋根と壁貸してくれよ。あと、シャワー。ベランダでも良いから」

「いや、良いよ。中に入って寝ろよ。また終わったら連絡するよ。多分十時くらい。それじゃ」

山高君電話を切る。

「だれ？」

「高校時代の火を付ける名人」

「火の付け方聞いてたの」

「あ」

山高君また電話を握って発信履歴。

「虫除けスプレーか何かがあるんならそれ使え、火炎放射みたいにさ。一部でも赤くなったら、あとは火が消えるぐらいうちわであおぎ続けろ。そしたらいつか付く」

土手の道を女の子たちの乗った車が帰ってくる。

グルメパンダはグルメなので笹しか喰わない。もし、グルメじゃなかったら笹以外も喰っていたらろう。

グルメ人間はいろいろと妙なものを喰う。深海魚の目玉、こいつはとても固い。深海の水圧にも耐える。グルメ人間お付きのシェフはこいつに上手く四点の穴を開ける。位置は手に入った目玉によって変わる。ハンダ付け用の焼きゴテを使う。これをウェッジウッドの珈琲ソーサーの上に置く。深海魚目玉の中身は液体なので、グルメ人間はその穴から吸う。吸う穴の位置によってとろみが違う。その他、豚の睾丸、生きた猿の脳髓、食べていると猿が声にならないような喘ぎ声を上げ、ぴくりぴくりと動く、様々なものを喰う。

そして、グルメパンダを喰う。

グルメパンダはグルメのために死ぬこととなる。ただでさえ少ないグルメパンダは減っていく。それでも、グルメパンダは笹しか喰わない。ますますグルメ人間はグルメパンダを喰う。

グルメパンダがグルメで笹しか喰わないのか、もしくは他の食物を単に発見できないだけなのか、どうしても体の構造として笹以外は喰えぬのか。実際のところは今の研究では不明である。

グルメ人間は一人じゃない。

グルメパンダはグルメのために死滅しつつある。

山高君、何とかBBQで赤っ恥をかかずに済んだ。

その上、わざわざ故郷から親友が自転車で来てくれた。

「わりい、オレそろそろ行くわ。先、帰るけど楽しんでて」

「えー、ブチョー、もう帰っちゃうんすかあ？」

「いや、岡山から友達がチャリこいで来てくれててさ、待たせてるんだよ」

「ええ、岡山って遠いんじゃないですか？」

「うん、新幹線で二時間ほどだから結構遠いよ」

山高君、自分の親友の自慢話をすると気分が良い。特にゲッパという男の話をするときは何故だか気分が良い。高校時代のゲッパを思い出す。妙に気分が良い。荷物をまとめて立ち上がる。

「でも、何でその人わざわざ自転車なんですか？ 別にブチョーが来てくれるように頼んだわけじゃないんですよね？」

「そう言えばそうだよな。何でオレ喜んでるんだろ。やっぱりもうちょっといるわ」

仮にの話だ。今日と同じように足が動いて、同じように進んで行って、同じようにコンビニに入って、牛丼を食っている僕のは四日後には破綻だ。東京に着くまで一週間の予定なわけ。それでも、僕は安い安いハンバーガーを頼張って、安い安い珈琲を飲んでいる。この肉は牛肉だと主張しているが、そんな馬鹿な値段が実現するはずがない。何の肉だ。パンダか。パンダは高いか。でも、何か得体の知れない肉だろう。

十時になっても山高帽子の野郎、連絡の一つよこさない。まあ、あいつの家は逃げやしない。いざとなったら玄関の前で眠ってやるさ。珈琲はおかわりし放題だ。ゆっくり待つさ。

しかし、東京に何があるんだろう。

明石には牛丼とハンバーガーがあった。あと、橋もある。とにかく足がパンパンだ。東京に着く頃にはさぞ凄惨なことになっているんだろう。とにかく肉だ。そら、筋肉、肉だぞ、喰え喰え。

それにしても店員さんが可愛い。案外珈琲も美味いんだ。おかげでもう三時間も珈琲だけでいるよ。可愛い店員さんがさっきから僕ばかり見ている。僕に気があるのかな。

山高君が家に戻るとパンパンの荷物を漫画みたいな自転車にくくりつけて、ゲッパ君が煙草を吸っていた。昔と違ってボサボサと髪が生えているからボッパ君ぐらいになっている。

「おお、よく来たな。酒でも飲みに行くか」

「お金ないよ」

「もちろんおごってやるよ」

「その前に風呂入らせて」

山高君、改めて空気を吸い込んでみると、確かにとても香ばしい酸っぱい臭いがした。

「とりあえず、今度からはさ、せめて前日までには連絡してくれよな」

笑いながらそう言って、玄関の鍵を開けてやる。

結局、二日目の朝も遅い出発になった。でも、ウィスキーを二杯おごってもらったし良しとしよう。

山高帽子は就職が決まったそうだ。おめでとう。君は僕に酒をおごってくれたから昇進できるよ。

僕らの周りで就職しない人間について君は心配していたけど、大学を出るだけ良しってもんさ。大学が全てとは言わないけど、入ったものは出とけば良いんだよ。

今、向かっているノブコフだって就職が決まってないけど、まあ、卒業するんだよ。あいつは多分酒はおごってくれないぜ。だから、就職が決まらないのさ。

でも、君は良いやつだよ。酒をおごってくれなくたって良いやつだ。友達を本当に心配するんだから。自分は就職が決まったんだし、手放しで喜べば良さそうなものだよ。でも、同時に君は残酷さ。心配するぐらいなら助けてやれば良いじゃないか。そう、あれこれ文句を言いつつも僕にウィスキーを飲ませてくれるみたいに。

ノブコフ君、バイトの準備をしていた。準備と言っても別段やることは無い。目覚ましを止めて、シャワーを浴び、珈琲を一杯に煙草を一本。一昔前はここでマリファナなんて吸っていた時期もあったけど辞めた。もう今はあの独特のにおいもしない。

「あと二時間」

ノブコフ君、ゲッパ君からのメールを確認すると、何度も読んだ文庫本の罪と罰を開いた。ノブコフ君、ロシアに憧れていた。厳格な知性と曖昧な宗教に寒冷なる気候。体を温めるため高い度数の酒を飲む。実際のロシアをノブコフ君は知らないが、本の中のロシアこそがノブコフ君の全てだった。

ゲッパ君はロシア女の息子だとノブコフ君は思う。何度か見たことがあるが、年齢の割りに美しい。乳房も豊満だ。しかし、ゲッパ君の話によれば物凄いヒステリー持ちだそう。ゲッパへの行き過ぎた愛だろうとノブコフ君は考える。オレの母もロシア女であれば良かったのに。

珈琲が空になったところで電話が鳴った。ノブコフ君は予定より早い電話に戸惑いながらも出ると、土竜君だった。

「ああ、ノブ君、もう大阪着いたから」

「は、なんでおめえも来るん？」

「仕事の都合で大阪なんだけどちょうど暇なんよ。ゲッパ君はもう着いてるの？」

土竜君は大学生じゃない。去年まで短大生をしていた。今は実家の仕事をついでいる。映像関係の仕事とノブコフ君は聞いているが、具体的に何をしているんだかはよく知らない。

「いや、まだけど」

「まあ、また連絡してよ、じゃあ」

電話を切ると立て続けにメールが届いた。

「パンクした 遅くなるかも」

東京に着くと神様がいらっしゃるに違いない。神様はきっと僕の筋肉痛も大学での失われた単位を直してくれるに違いない。神様、もしよろしければ少しばかり御尻も痛く存じます故、そちらも何卒。

これまで多くの人々が神様を求めて旅をしてきた。公には伏せられているが、コロンブス君も松尾芭蕉君も実は神様探しの旅だった。彼らは無事に神様を見つけられたから、歴史にも大きく名前が残っている。神様と言っても十字軍が聖地を取り返しに向かって求めた神様じゃない。キリスト教の神様じゃないというわけじゃなくって、仏教の神様、仏様でも無いし、イスラム教でもない。みょうちくりんな新興宗教なんかでもない。自然崇拜のアミニズムなんかでもない。旅先で待っている神様ってのと、一般的に言う神様ってのは違う。そう、僕は神に会いに行くのだ。

直射日光降り注ぐ二号線の歩道でパンクを直しているといよいよ頭がおかしくなってきたか、わけの分からないようなことを考え出していた。

全くこの町も変わってしまった。地震の後の復興のせいなのか、自分の記憶が古過ぎて曖昧なのか。

昔はもっと広い町に感じたものが、今じゃ自転車で一瞬、そのはずがパンク修理だ。

うん、水が美味しいよ。

土竜君が心齋橋に着くとゲッパ君、ノブコフ君、二人並んで禁煙の看板の前で美味そうに煙草を吸っていた。

「おいおい罰金取られるぞ」

「ハイザラ、アル、タバコ、イイ」

ノブコフ君、単語に抑揚を付けずにロボットのように言い、白い缶を指差した。

「いや、どう見てもオフィシャルの灰皿じゃないだろ」

「シラナイ、カン、アル、タバコ、スウ」

ノブコフ君、先ほどと同じ調子で答える。ゲッパ君はこれまで見たことないほど美味そうに煙草を吸っている。

「分かった分かった、喫煙席のあるところ行って珈琲でも飲みましょう」

土竜君は諦めて自分も煙草を吸い始めた。

どういう理由で土竜君もいるんだか分からないが、ノブコフは珈琲をおごってくれたから良いやつ。

土竜君は相変わらず金が無いらしいが、自分の分の珈琲代は出していた。

ノブコフは山高帽子と違って呼び出しておいたくせにバイトがあるなどとのたまっている。全く困った男だ。珈琲で良いやつだと思ったが帳消しだ。土竜君に至っては仕事があるから戻ること。

おいおい、寂しいんだよ、一人にしないでおくれよ。パンク修理の腕を褒めてくれるのは結構だけど、とりあえず一人にしないでおくれよ。

タンポポ職人の仕事はベルトコンベアの上の刺身にタンポポを置いていくことです。

タンポポ職人は、毎日全身真っ白の服に身をつつみ働きました。彼には休みはありません。代わりに一日の労働時間は四時間だけでした。

しかし、タンポポ職人には残りの二十時間についてあまり記憶がありません。

時々、友人に会いました。

友人とは小学校から大学まで一緒の幼馴染でした。彼はタンポポを置く仕事はしません。彼はスーツを着て働きます。妻も子どももいます。タンポポ職人は結婚はしていません。

タンポポ職人は途中で大学を辞めてタンポポ職人になりました。

タンポポ職人の残りの二十時間は実のところ大半が睡眠でした。タンポポ職人は昔から眠るのが好きでした。

起きている時間には、やはり昔から好きだった小説を読みました。読み終わると紙に書評を書いて、作家順に紐で綴じました。

友人はタンポポ職人は優しいし、良い人だと思っていますから、今でも友情を続けています。タンポポ職人の生活については何も言いません。タンポポ職人が良いと思っているなら良いだろ

うと。

実際、タンポポ職人は自分の生活を悪くは思っていませんでした。たしかに一日四時間しか働かないので、お金はほとんどありません。部屋はとても狭かったですし、食事も質素でした。しかし、タンポポ職人にとってはもはや普通の生活になっていましたから、特に不自由はありませんでした。

タンポポ職人の方でも同じように友人の生活については何も言いませんでした。時々、あまりに疲れているのを見ると、心配もしましたが、彼が良いなら良かろうと。

二人とも自分の突っ込むべき問題では無いのだという点で一致していました。

しかし、友人はそろそろタンポポ職人に何か言ってやらねばならないと思うのです。しかし、彼が何か言うということはありません。

ちょうど彼の体も仕事の疲労のために何かおかしくなり始めていた春でした。

ノブコフの家までが意外と遠い。大阪府ってのも地図では小さいくせに随分広い。そしてくさくさして迷う。何がくさいのか分からないが、ゴミのようなにおいがする。地下のにおいかしら。分からない。とにかく自転車をこぐ。水を飲む。この線路はどうやって乗り越える。分からない。

とりあえず、お好み焼きでも食べようか。お好み焼き屋に入れば水が好きだけ飲める。

ノブコフ君には悩みがあった。大学を出た後のことだ。

ノブコフ君は自分は社会不適合者だと思っている。仕事をしたって続かないと思っている。単純労働は絶対に無理だろう。今のバイト先の本屋に就職しようか。これは悪くない。しかし、どうも釈然としない。

ノブコフ君はゲツパ君に相談してみようと思っている。彼こそ社会不適合者である。

バイトを早上がりさせてもらい電車で揺られて帰ってみると、まだゲツパ君は着いてない。何故だか西の方の吹田なんかでお好み焼きを食っている。仕方が無いから家でまたシャワーを浴びて罪と罰を開いていたら、着いたとのこと。

「よく来た。よく来た。何か欲しいものあるか？」

山高帽子君同様、ノブコフ君も気前が良い。

「ビールが二本ほどあれば十分だよ」

「そうかそうか」

そう言って、ノブコフ君、ゲツパ君と自分のビールにつまみ、それからアーリータイムズのミニボトルを買った。

ノブコフ君の家は山の上の竹林の裏にある。初めて来るゲツパ君は、急な坂に筋肉痛の足がひいひい言う。ノブコフ君、妙なところに住んでいる。しかし、部屋は整然としている上に趣味も良い。

二人は仲良く酒を飲みながら将来の話をする。未来への希望の中に暗さが時々垂れる。

起きてみると魚になっておりました。

ちょうどこのごろ魚になりたかったので、構わない、いえ、むしろ歓迎であります。

早速、海の中を散歩に出かけることにしました。なかなかこれが気持ちが良い。口を開けて泳いでいればプランクトンが入ってきてくれて腹は膨れる。特に、昆布の踊りを止まって眺めることが気に入った。上の水面には太陽がゆらゆらと揺れて、その光が昆布に注いできます。

それでも、泳いでいないとプランクトンは上手く入って来てくれませんし、一度にたくさん食べられるわけじゃないですから、基本的には延々と泳いでいることになります。時には海老なども食べれます。

部長は釣りが趣味だなどと言っていたから、きっと私がこうして毎日海にいるなんて知ったら羨ましがることでしょう。そういえば、会社では私がいなくなったことをどう知っているでしょうか。まあ、魚となった今となっては知ったことじゃありません。

魚になっていくらか経った日の午前中、いつものように泳いでいますと、ふわふわと見たことの無いものが水中を浮き沈みしていました。良いにおいがするので食いついてみました。

実のところ、魚の生活は飽きて来ました。毎日、ただ泳ぐばかり。人間だったら時給はいくらぐらいのものでしょうか、まあ安いものでしょう。

そんな中、この初めて見る良いにおいのする物体は私の心を強く惹いたのです。

次の瞬間、体がふわりと引っ張られ、口の中に痛みが走り、きらりと光る糸が見えました。

もう、魚の生活も辞めようか、水面へと引っ張られ、途切れる意識の中で私はまた深い眠りに付くのです。

起きてみると昼だった。

山高帽子のやつにしても、ノブコフのやつにしてもだ。僕が旅の途中だって分かっているのに、どうして夜遅くまで話し込むかな。僕としては、屋根を借りている身だから断れないのだ。

それでも、ノブコフはアーリータイムズのミニボトルをくれたから良いやつだ。アーリータイムズというのが素晴らしい。ウィスキーの中でも値段は高く無いが、僕の好きなバーボンだ。昼にはなかなか美味しい珈琲もおごってくれた。ノブコフは良いやつ。

ただし、良いやつだからって僕の旅を妨げて良いわけじゃない。逆を言えば、予定通りに進めれば問題は無い。大丈夫、僕の足で遅れを取り戻してみせようじゃないか。

気付いたらいつの間にか一号線に乗っていて、恐らく日本で一番人気があるだろう街、京都を走る。京都のどこらへんにいるんだかさっぱり分からないが、大きな寺を過ぎる。写真を撮る、そんな生ぬるいことはできないよ。僕の足も心も三日目と来て限界なのだよ。寺の名前すら確認せず、心のシャッターボタンを押しておけば良い。人間の脳みそはよくできているから細部までは思い出せずとも良い寺を見たということは忘れない。

市街地を抜けると坂になる。ああ、これが逢坂の関というやつだね。百人一首だろ。何だか知らないが授業でやる羽目になって、僕は負けっぱなしだったよ。代わりに向かいに胡坐をかいて熱中していたリサちゃんのパンツをずっと見ていた。リサちゃんは何であんなに百人一首が強かったんだろう。今でもリサちゃんに電話ができるなら、この坂の歌を読んでもらえるのになあ。振られちゃった女の子に今さら電話なんてできないさ。いや、今ならできるかな。

リサちゃんは何で外国に行きたいんだっけ、外国人の男と付き合ってみたいとか言ってたっけ。外大に行って留学するって言ってたけど、今はどうしているかな。そうだ、スチュワーデ

スになるって言ってたな。体育祭の打ち上げの時に言っていた。三年の時、二人きりで打ち上げた。きっと、リサちゃんも僕のことを好きだったんじゃないかな。だって、僕はこんなにたくましく自転車で坂を登れるんだぜ。でも、あの頃は受験があったからね、仕方が無い。外大で絵に描いたクソみたいなペーペーのダイガクセイに抱かれたりしちゃったかな。僕と一緒に逢坂の関は走ってくれないかな。ここは良い眺めだよ。ほら、僕の走る一号線に、高速道路、その向こうには線路もある。両側はなかなかの山に挟まれているよ。まさに関所にはうってつけ。一人で走るにゃ、少し贅沢過ぎる。でも、君が自分になりたいと思ったスチュワーデスになるために頑張ってるなら、とりあえずは僕は我慢して一人で自転車をこぐよ。ボブだかジャックに抱かれて結婚したって幸せなら、まあ、僕は自転車をこぐよ。でも、僕をすっかり忘れるのだけは許してくれよ。ほんの片隅、別に昔好きだった人なんていう贅沢なカテゴリーじゃなくて良いから、僕の席を残しておいておくれ。決して、邪魔にはならないから。

そら、頂上だ。トンネルだ。

大津に入って僕は右手を上げて吠えるよ。

まあ、元気でいておくれ。

ノブコフ君、夕方に目を覚ました。昼にゲッパ君を送ってやってすぐに眠った。今日はバイトも無い。

ゲッパ君は大学院に行くように勧めた。自分がしたいと思う学問を積むべきだ。それもできうる限り体系立てて、アカデミックに。

ノブコフ君は大学院に行くことにした。ゲッパ君の話を聞かなくとも、考えていたことではあった。しかし、もう決めた。自分にはきっかけが必要だった。もしかすると、自分は社会から逃げたのかもしれない。

今頃ゲッパ君は京都ぐらいでゆっくり寺でも眺めているだろうか。

ノブコフ君の携帯が鳴る。

「や、昨日はありがと。これから初めての野宿です。アウトドアなオレってカッコいい」

満面の笑みでウイスキーのミニボトル握り締めて、後ろにテントと琵琶湖の入った写真が付いていた。

それを見て、ノブコフ君は笑う。

「全然カッコよくねえわ。馬鹿、二度と来るな」

メールを送って携帯を閉じた。

「あー、オレもチャリ買おうかな」

ノブコフ君、大きな欠伸をしてベッドに横たわる。

テントを建てるなら水辺。海でも河でも良いけど、何だかカッコいいじゃないですか。丸太さえあればログハウスを組んでやりたいところだよ。

アウトドアほど良いものは無い。なぜってわざわざ金と時間を使って、外で寝苦しい一夜を過ごすのだ。それだけのデメリットを払ってまで多くの人がアウトドアを楽しむ。アウトドアは良

いもので、アウトドアな僕はなかなかイケてる。

琵琶湖という景観をバックにしての初めてのテント設営は上手く行った。琵琶湖の向こうの山に日が沈んでいく。湖畔の芝生にテントをかまえ、アーリータイムズをなめる僕。なんてカッコいいんだ。

それにしても、東京ってのは遠い。まだまだ半分だ。明日は関が原。そこを越えれば東日本。JRも管轄が違う。僕のICカードは使えるだろうか。自転車しか乗らないから関係ないか。

ノブコフが自分で書いた小説をくれたから、そいつを読もうか。いや、何だかとても眠たい。お腹が減った。でも、近くに食料を買えそうな場所は無かった。水を飲もう。そして眠ろう。テントで眠るのは初めてで怖いけど、ここは日本さ、何とかなるさ。

日本と言う国は浮島であります。

その新しい説は世界に衝撃を与えた。

ぷかぷか浮いているのであります。そう、元々は大陸とつながっていたのですが、蟻の仕業なんですね。今はもう日本海になってしまっているんですが、その部分の土は、ロンイプシたる鉱石、もう今は無いのですが、かつてごく微量、そうニアリーイコールゼロ、しかしながらノットゼロ、そういう鉱石で生成されておりました。それから、実のところ日本の下もその鉱石で生成されていたわけです。あと、河や湖、特に琵琶湖、あそこはかつて、そう紀元前一一九八年十一月の隕石衝突の際にイロプンシ、失礼、イシプロン、あれ、まあ、その鉱石が大量に降り積もったのです。

それらの鉱石、ええ、名前は、名前は、ええと、それを蟻が食い切ってしまった。

そうして、今の日本と言うのは実は浮島であるわけです。

そのせいで時々琵琶湖は日本の中をぷかぷかと揺れて移動するわけです。何せ、そう、ロンイプシだ、ロンイプシの跡なわけでございますから。

分かりますね。

そんなもん分かるわけがなかろうが。自分の叫び声で目を覚ました。携帯電話を探して電源をつけると、まだ深夜十二時だった。早く寝たせいだろうか。妙な夢だった。安物の寝袋は期待していた以上に暖かった。

煙草を吸いにテントのチャックを下ろすとかなり寒い。しかし、寝ぼけた頭を覚ますにはちょうど良いだろう。

テントを出ると風があった。ジッポは風にも負けず煙草に火を付けた。弟が成人式の祝いにくれた。

空には九月の満月が出ていた。本当に純正の満月かは知らないが、少なくとも僕には完全な満月に見える。月明かりに照らされる琵琶湖の向こうの町も山も、眠る前と同じだった。大丈夫、琵琶湖は流されてなんかいない。

ああ、倉敷に帰りたいな。旅なんかしたってロクなことなんてありゃしない。金も減るし、時間も減る。第一、僕は何のために旅なんかしているんだ。神様を探しているんだっけ。神様なんていないに決まってるだろ。世界にあるのは時間と物質だけだ。物質が上手い具合でくっついた

結果、命が生まれて、その一部で僕も生まれているだけだろうが。時間が過ぎれば僕は動かなくなる。どんなに上手く物質がくっついて神様にはならないんだよ。

真っ暗な水面に月だけがぽっかり映っている。あの山をいくつ越えたら倉敷なんだろう。大変なところまで来てしまったよ。もう、戻るも行くも同じか。大変だなあ。ここから先は友達もないし、野宿ばかりか。

ん、何だ、手がかゆいぞ。まさか蟻か。蟻の報復か。いや、まさか。あいつらは眠ったのだ。時間がやってきて動かなくなって、土の下に眠っているんだ。だが、掌がかゆい。なんだ。え、痛いじゃないか。手が痛い。痛い。

あ、これは寒いのか。寝ぼけていて分からなかっただけで物凄く寒いんだ。でも、何で手がかゆいんだ。

えい、煙草どころじゃない。テントに戻ろう。眠ろう。弟は倉敷であの月を見ているのかな。寝ているかな。

ああ、弟よ、夜は怖いよ。僕はそんなこと、これまでつゆ知らず生きてきた。多分、君も知らんだろう。ノブコフ君や土竜君たちも知らないに違いないさ。弟よ、君がくれたライターがとても暖かい。水を飲んで僕はもう寝てしまうよ。

自宅の会社とは言え、社会人の土竜君の朝は早い。ゲッパ君の朝は夕方に訪れることもある。

しかし、その日の朝は琵琶湖の寒さのおかげでゲッパ君にとっては数少ない美しい日の出を見る朝となった。

ゲッパ君が三日かけてこいだ距離も朝日さんにとっては一瞬の事で、土竜君は日の出も終わって随分経ってから目を覚ました。

「おはよ、琵琶湖の朝日は爽やかだお。今日の朝御飯はバナナに牛乳、とってもヘルシー。寂しいのでたまにはメールしてください。まあ、ほとんど電源切ってるんだけど」

写真が付いていて、琵琶湖にいるとは全く思えないような普通のコンビニの前で牛乳とバナナを持っているゲッパ君が写っていた。

土竜君のもとには一日に三通ほどゲッパ君からメールが来る。その度に土竜君、感心する。一体何に感心しているんだか分かっていないが、

「おお、やるなあ」

と独り言を言ってしまう。それから、メールを返してやる。返事は来ない代わりに、また報告が届いて、「おお、やるなあ」と。

土竜君、午前中の仕事が終わってみると、今度は「古の合戦場」というタイトルでメールが来ていた。今度の写真はコンビニでアイスを食べていた。

よほど寂しいのだろうと、土竜君、米一さんにゲッパ君の旅のことを教えた。米一さんは、ゲッパ君も土竜君も尊敬している倉敷の地方雑誌の編集長である。

古の合戦場は今すぐにでも合戦が始まるような雰囲気を感じている。これぞ国道と言った具合にただ道が伸びている。緩い坂が上下して古い家が並ぶ。合戦場を自分の足で走る兵士の中では恐らく今の僕は最速だろう。

岐阜県は良い県だ。自然がたくさんある。それだけで良い県にしておまおうじゃないか。

人口過密化、過疎化、環境問題。どうだって良い。綺麗な風景は綺麗な風景で良い。じいさんばあさんだけの村には暖かさがある。

みょうちくりんな具合で田舎に人を呼ぶとか言ってさ、山を丸裸にしてホテルを誘致するって言ったり、干潟を埋め立てるだの、廃墟の島を公開だと叫ぶやら、省エネ製品でエコだの言って、まだまだ使えるものを捨てさせたりだとかさ。そういうことはしないで良い。ジャズが馬鹿売れするように、オリコンチャートさんに金を渡して上位にしてもらおうよう頼むかい、もし、ランキング一位にマイルス・デイビスが出てきたりしたら、僕はもうジャズを聴かないよ。いや、聴いてしまうかな。マイルスはマイルスだから。

一体誰に申し訳を立ててるんだか知らないけど、環境問題云々の話じゃなくって、単に僕が気分良くチャリをこげるかどうかの問題だ。無理に古いものを壊して新しくしないで良いし、古くて危ないものは採算が合わなからうが新しいものにすれば良い。そんなことはガキでも知っているし、きつとこの合戦場を走った足軽おっさんでも知っている。

それにしても疲れた。水だ、水で生きるのだ。

米一さんは、かつてゲッパ君のように大学を留年し続けた。いや、米一さんの方が二枚も三枚も上手で、一回大学を辞めて、また入りなおして、留年を重ねてやっとの思いで卒業した。

留年すると知り合いがいなくなるから本を読む。ゲッパ君は本を読む。米一さんも本を読んだ。それが長じて雑誌を作り編集長になった。

「ほお、ゲッパ君、そんなことをしていますか」

米一さんは立派な方だが、自営業ゆえ貧乏なときは貧乏していて土竜君のおごりで珈琲を飲みに来た。米一さん、血圧が二百を越える不健康故に本来珈琲は飲むのはまずい。しかし、米一さんおかまいなしに煙草を吸いながら珈琲を飲む。

「はい、何で行ってるんだかよく分からんですが、出発前に阿呆が云々言うてました。大阪で会った時には神様が何たら行ってましたから、相当キテます。昼頃に関ヶ原言うてましたから、多分今頃岐阜ぐらいじゃないですか。とりあえず、寂しいみたいですから励ましてやってください」

「じゃあ、ちょっとメールでも送ってみましょうか」

米一さん、携帯を取り出し文章を作る。土竜君から見ると編集長というだけあって、文章を作る時の米一さんは一際かっこよく見える。

「そういえば、米一さん、お体は大丈夫ですか？ 先日もぎっくり腰をしたと伺いましたが」

「ええ、大丈夫です。世の中には地雷で足が吹っ飛んでしまっても歩く人もいます。世界は広いのに自分だけ痛がってるのは悪党です」

米一さん良い人なんだが、土竜君には時々意味が分からない。

「ところで、ゲッパ君はメールの返信をしてきませんよ。旅の間は携帯電話の節電のためにだいたい電源を切っているみたいです」

「いえ、もう、返信が来ましたよ。めちゃくちゃ楽しいです、とのことですよ」

米一さんの素晴らしさを僕が語るのは難しいだろう。

行き着けのジャズ喫茶のマスターに「米一さんと友達になった」と自慢しに行ったら渋い顔されて、「あの人は若い人から見ればかっこいいかもしれないけど、同年代から見たら駄目だよ」なんて言われた。マスターもずれた人だよ。自分の直接の知り合いじゃない人から一人でも、それが若者でも知恵足らずでも尊敬されるなんて人間として凄いことなのだ。そんなことも分かってないのか、年を重ねて呆けてしまったのか。でも、マスター、僕はあんたもかっこいいと思うよ。田舎の町で、デジタル万歳のこんな時代にLPレコードに真空管アンプにこだわって、仕事しながら空いている時間でジャズ喫茶をやっているんだから。だから、マスター、あんたの気持ちは分かるんだよ。好きなことだけやらずに家族を養うためにきちんとした仕事もやれっというんだろ。分かるよ。

だから、米一さんの素晴らしさ、かっこよさを語るのはあまりに難しい。米一さんは、あまりに欠点を隠さない。美質をさも美質だと語らない。ただ、自分が好きなものを好きと言い、その通りに動く。

でも、米一さん、あなたの想像以上に僕は速いのですよ。岐阜市なんて通り越して、必要なんだかどうか分からないような高速道路がぐるぐる回っている迷路みたいな名古屋の町にいるん

です。それとも岐阜にいるなんてのは、米一さんじゃなくって土竜君の予想なのかな。

しかし、旅はどうか、そう聞かれても困るんですよ。ずっと国道を走るだけ、それも必死にペダルを回すだけ、そうしないと尻の痛みに腿の張り、そいつらに負けちまう。もう倉敷に帰りたいですよ。それに目的も無い。さっき岐阜から愛知に入る橋でやっとそれを思い出したんですよ。この旅には目的は無かったと。

単に自転車をこぎたかったんです。遠くまで。ただ、水を飲んで、何かを食べて。

それにしても、たまには風呂に入って屋根のあるところで眠りたい。いや、昨日しか野宿はしてないのか。もう少し頑張ってみるか。

「ところで、ゲッパ君はどこで寝てるんだい」

米一さんは土竜君の金で二杯目の珈琲を頼んでから聞いた。

「野宿みたいです。友達がいるところでは泊まらせてもらっているみたいですけど、基本は野宿みたいですよ」

「名古屋には友達がいるのかな」

「中学校の頃の友達が一人いますけど、多分、まあ、泊まらないでしょう」

「どうして？」

「はあ、まあ、つまらないやつなんです」

「どういう風に？」

「父親はエリートで一流大学でキャンパスライフも順風満帆、そう、キャンパスライフが順風満帆ってというのが一番いけないですね。会話の内容は全部ランキング十位以内のJポップ、つまり愚民向け、あ、失礼しました、そう、楽しいダイガクセイの会話なわけです。ゲッパ君や僕の苦手とする人種です。一晚、同じ屋根の下にいるには厳しい相手なんです。ロクでもないんです」

「なるほどね。それは確かに泊まらない方が良くもしいないね」

土竜君と米一さんは美味しい珈琲を二時間でも三時間でも飲んでる。別に二人とも暇なわけでもないんだか、珈琲だけは延々と飲んでる。

UCは役に立たないやつだ。元々面白くない男だったが電話にも出りゃしない。せっかく久しぶりだから会ってやろうと思ったのに。わざわざ岡山から自転車をこいで来ているんだから、珈琲の一杯ぐらいおごってくれても良いようなものだ。あいつは何だかんだで一流だから金は持っているだろうし、良い店も知っているだろう。あわよくば一泊させてくれるかもしれない。風呂にも入れるかもしれない。

この町は道路がぐるぐる回っていて方向が分かりゃしないし、ロクでも無い町だよ。公園で寝ようと思ったら『小屋掛け禁止』の看板だ。高速道路の下にはなかなか良い風貌のおっさんが、小屋掛け、している。あいつらのせいだろう。全くロクでも無い町だ。

UC君は友達と居酒屋にいた。

ゲッパ君たちの言うところのロクでも無いダイガクセイというやつである。

しかし、ゲッパ君たちが言うほどロクでも無いことも無い。話の内容は世間の動きに敏感だったし、知性ある話題もする。全員が楽しめるよう配慮もする。明日の学校の授業に無理が無いよう上手く帰り、時には何人かで企画し楽しい旅行もする。ゲッパ君、土竜君なんぞより余程ロクでもある。

土竜君、ゲッパ君、もしかするとロクでもないという言葉の意味を間違えているんじゃないだろうか。つまり「ロックである」と。それなら納得も行く。しかし、ロックなんてものの意味を土竜君も、ゲッパ君も知らない。やはり、ロクでも無い。

「ああ、ロクでも無いやつが突然来たよ」

UC君はウーロン茶を飲みながら言う。

「ロクでもないって？」

女はカルーアミルク。

「大昔の友達。いや、知り合いて方が正しいぐらいのものかな。面白いやつだけど、とにかくロクでもない」

「ふうん」

UC君は迷惑そうな顔に少し笑いを混ぜながら女の子に話す。女の子はどうでもいいような表情でカルーアミルクをなめて、たこ焼きをつまむ。

UC君としては非常に迷惑な話だ。突然、電話が来て、無視してみたら、自転車で名古屋に来ております、珈琲でもいかがでしょうか、だと。そんなこと知らない。珈琲一杯なんてのは安く無い。一生会うんだか、会わないんだか分からんような大昔の知り合いと飲むのも馬鹿馬鹿しい。

「大昔って？」

「中学校」

「大昔だね。何で突然？」

「知らないよ。そういうやつなんだ。だからロクでもない」

しかし、UC君、不思議と珈琲が飲みたくなってくる。

UCも案外良いやつで忙しそうにしている中きちんと電話を折り返してくれて、良い寝床まで教えてくれた。町外れの県営公園。なかなか広い上に芝生もある。申し分ない。素晴らしい寝床だ。後で、ちょろっとだけ遊びに来てくれるそう。

シャワーに屋根付きの寝床。まあ、悪く無い。だが、旅が終わればそんなところ飽きるほどいる。自宅だ。旅はやはりテントに寝袋。合わせて二万円も出したんだから、せめて三泊はしないと元が取れない。

のうのうと屋根のあるところで、テレビを見、明日の予定を考える。そんな下卑た生活は平民どもで営んでくれ。優雅な僕はテントの中で明日を待つよ。何の予定も無い、ただ自転車をこぐだけの明日だ。明日は何も言わずにやって来る。僕はテントの露を払いながら、今日になってしまった明日の空気を吸うのさ。トイレで歯磨きをして、煙草を一本吸って走りだす。ちょっとだけくさい体で。

ん、何だ、あのいかついバイクは。レースでもおっぱじめるのか。

ん、UC君からの電話。

ん、ああ、あのバイクがUC君なのか。

ん、どうしたもんだ、つまらない男でも無さそうじゃないか。

ん、手ぶら。なぜ手ぶら。

普通さ、こういう時に手ぶらってありえないと思うんだよね。そんなに親しくなくても、こっちはチャリだよ、チャリ、人力なんだよ。それをバイクで見舞うわけだからおにぎりに珈琲ぐらい無くっちゃ話にならないよ。男二人でテントの中で話し込むなんてありえないしさ。

やっぱりつまらん男だよ。

手持ち無沙汰にされたってこちらも困るってものだよ。話ぐらいいくらでもできるけど、やっぱり珈琲ぐらいなくっちゃ手持ち無沙汰なのも当然なんだよ。

亀がゴールへ向かってのそのそ歩みを進めている間、兎は深い眠りについていた。足も腫れ、起きたところで走れるだろうか。

兎はよく走った。たとえ、歩いた亀に先にゴールされようがよく走った。その走りは、見ているみんなを興奮させた。

「やっぱり走らせるなら兎ですよ」

観客関で猿が蟹に言う。

「全く、兎氏の走りが見たくて今日は休みを取ってしまったよ」

蟹は葉巻を吸いながら答える。

「今日を逃したら見れませんからね。何せ、千キロもの距離だから全てを見るわけにもいきませんしね。どちらが勝つと思います」

「そりゃ、亀だよ。亀のやつは面白い走り方はしないけど不眠不休で走れる、いや、歩けるからね。兎は速いけど短距離しかできんだろう。すぐばてちまう。何よりペース配分なんて面白くないことはやらんからね」

「まあ、そうですね。じゃあ、賭けるのは亀の方に？」

「いや、兎だろう。そりゃ、勝ち金も欲しいけどここの賭けのルールは好きな選手にだろう。それが、彼らのギャラになるんだから。で、君仕事は？ 上司の前で堂々とずる休みってわけじゃないだろうね？」

「いえ、勿論、スタートだけ見たらすぐ向かいますよ。蟹さんは例のバスで追いかけるんでしょう。また、明日会社で教えてください」

「うん、結構。それじゃ、僕はバスに向かうとするよ」

バスは兎と亀の後をついて行った。二匹の間に差が付くと先に行くウサギの後を追いかけて、二時間ほど走らせて、乗客たちが一通り満足したらスタート地点に戻って来る。

猿も兎に賭けたいのだが、レース券には配当1.5倍の亀と記されている。

掛け金程度の小金、好きな方に賭けたって良いような気もした。しかし、生活を考えればそれはできない。全く、大学時代の悪ふざけごときで親族の偉いやつら呼んできて裁判沙汰にしやがって、退学処分、挙句に仕事の無かったところへ特別に雇ってやろうなんて言ってきて、掃

除人なんてわけの分からん仕事で、今じゃ上司、部下、以下の関係、同じ会社の空気を吸っているとは思えない生活差。それでも、仕事があるだけ良しとせねば。そういう社会だ。明日の食料があるのだから。

小さい勝ち金だが、オレには生命線。しかし、兎が勝ってくれて、このレース券が紙切れになってくれたらなんて願ってしまうのだ。

UC君とゲッパ君は夜の公園から歩いて自販機を目指した。

「いや、忙しそうにしているところ突然呼び出してすまんね。テントだけで何も無いところだけどゆっくり話して行ってくださいな、一人でずっと走ってるもんだから寂しいんだよ」

UC君、最初は手ぶらも気まずいかと思ったが、二人でぶらぶら夜の公園を歩くってのはなかなか良いものだし、お互いに変に気を使わなくて良いという結果になった。夜の公園には誰もいなかった。欠け始めた月が雲にかかってちょうど良い明るさだった。

近くの駅まで歩いて五分もかからず東海道本線の小さな駅についた。ゲッパ君は故郷を想った。小さな駅はゲッパ君の住む倉敷の隣の小さな駅によく似ていた。出発するまでは名古屋なんて街はとても大きな街で、近くの駅もみんなそれなりに大きいものだとばかり思い込んでいた。

「何飲む？」

ゲッパ君、UC君に聞く。

「何にしようかな。珈琲にしようかな」

UC君はあえて五百円玉を選び自販機に入れ珈琲を買った。お釣りが音を立て、ルーレットが回りはずれをさした。

「僕はコーラにしようかな。チャリで走っていると糖分が欲しくなるんだよ」

ゲッパ君は少し迷って自分の財布からお金を出した。UC君も少し迷ったが、釣り銭を取って自分の財布に収めた。コーラが出てきて、ルーレットは規則正しくはずれをさす。

UC君は歩きながら将来の話、来年の春の就職の話をした。

「院には行かないんだね。理系だし、てっきり院に行くものだと思っていたよ」

「働きたい仕事なんだよ。ベンチャーだからずっといるつもりは無いけど、五年ほどはそこで働きたいんだ」

「何の仕事？」

「システムだけど、携帯のアプリを作るみたいなのがメインかな」

「正にベンチャーって感じだな、大丈夫なのか」

「まあ、職場環境は良いよ。保険なんかの福利厚生も休暇もきちんとしてるよ。システム系だから多少の残業はあるみたいだけど、八時にはみんな帰ってるみたいだし。納期前とかはどうか知らないけど、そんなに遅くないみたい」

「ふーん、オレは留年しなかったら院に行きたかったけどね」

「大学好きなんだ？」

「まあ、そうだな、留年してまで長居したいぐらいには好きだよ」

「悪い悪い。まあ、気にするなよ。留年やら浪人やら社会に出ちまえば大差無いよ。突然チャ

り乗って東京とか面白い人間してるみたいだしさ。全然気にすることないさ」

UC君は心からそう思う。UC君は自転車じゃないが、バイクでいろいろ行った。ネットカフェに泊まって、仙台まで行ったのが一番遠かった。レース系のUC君のマシンでは遠距離はしんどかった。それでも、テントに寝袋を自転車にくくりつけて旅するなんかは流石に漫画の世界だと思っていた。

「大丈夫、気にしてないから。気にしてたら今頃集中講義でも受けに行ってるよ」

ゲッパ君は明るく笑う。表情は暗くて見えない。久しぶりに会った大昔の友達に励まされる、そういうことを素直に受け止める男である。

UC君は笑顔で自分の次の春を話し、ゲッパ君は不安そうに自分の次の春を想う。

UC君は良いやつだ。珈琲もウイスキーもくれなかったけど、良いやつだ。話してて相変わらずつまらんとこもあったけど、あいつは良いやつだ。同級生の友達であんな良い顔で来年の話をするやつはいない。みんな曇った不安と共に過去にひたる。別に罪悪じゃない。でも、明るい顔で来年の話をできるやつの方が偉いと僕は思う。僕も来年を明るい顔で話せるようにならなくちゃいけない。

長い長い愛知県に、静岡県。実に平凡で面白みの無い県だ。どこか岡山に似ている。中途半端な地方都市の国道ってのはどれも同じなのかもしれない。足と尻は限界でにおいもちょっと厳しくなってきた。浜名湖の近くの民家から貝の独特のにおいがして、他人事じゃないな、なんて気付くぐらいなもの。

コインランドリーは意外なまでに高かった。国道から少し外れた寂れた昼過ぎのコインランドリー。百円玉のワンコインなのかと思ったら、大きいコインともう少し必要だった。そのくせ千円札は入らないし、両替機も無い。コーラを買ってそのお釣りで、洗濯機がやっと回る。誰も来ないから水道で頭を洗う。足が錆びたテーブルの上に灰皿があって、久しぶりの文化的生活を感じる。それにしても、困ったことに帰りのバス代ぐらいしかない。母さんにメールしてみたら、すぐに銀行に振り込んでくれるって。何で僕に親知らずが生えて来ないんだろうね。大きい痛い親知らずが十本くらい生えて来ても良さそうなのに。本当にありがとう。

面白くない県だよ。理由なんか無いけど。使ってるギターがヤマハでもわざわざ寄る必要も無いし。別に悪い県だなんて思わない。きっと岡山県だって、倉敷市だって、自転車で足パンパンのお尻ヒリヒリで来たら実につまらんとこらだ。

もう、本当に帰りたいから本気でこぐ。今までだって本気だったけど、もう本当に帰りたいから。

でも、不思議とずっとこいでいたい気もする。明日は雨が降るかもしれない。お金も入るし、雨が降ったらスーパー銭湯にでも寄って、図書館でゆっくりノブコフの小説でも読もう。夜はネットカフェぐらいでも行こう。いや、ビジネスホテルに泊まっても良い。とにかくゆっくり文化的生活でもたしなもう。そしたら、また足も元気になる。そしたら水を飲もう。どこまででも行ける気がするんだ。

旅の芸人がいた。一人きりで地方を歩き巡り、ナイフを投げ、火を吹き、客たちから笑顔と

食料、衣類をもらった。芸人として生きることにはロマンを持っていた。

しかし、芸人も年を取った。旅をし続けるのに疲れ始めていた。

或る晩、芸人は妻をもらう夢を見た。夢の中での自分はとても幸せそうだった。

そこで芸人は次の日、妻が欲しい、と黒板に書いて芸をした。偶然、芸人のような男と結婚したいという女がいた。女は芸人の妻になった。二人で旅をした。女は芸をすることは無かったが、洗濯、炊事をしたし、生活について文句一つ言わなかった。芸人は幸せだった。

しばらくした或る晩、芸人はまた夢を見た。今度は子どもを持つ夢だった。やはり芸人は幸せそうだった。しかし、女は芸人と同じくらい年を取っていたので、子どもを持つのは難しかった。

芸人はがっかりもしたが、次の日も芸をした。すると、サーカスに入りたいという子どもがいた。子どもは芸人に弟子入りを申し込んだ。芸人も妻も喜び、三人で旅をするようになった。子どもは文句一つ言わず、難しい芸も会得していった。やはり芸人は幸せだった。

子どもの芸も上手くなり、妻は身の回りの世話をよくしてくれた。芸人はほとんど何もしなくてもよくなってきた頃の或る晩、芸人はまた夢を見た。芸人は暖かな家の中で三人で暮らしていた。

明るく朝、芸人は二人に家を持つことを提案した。

妻は、旅をする芸人が好きなのだ、旅こそがあなたの家だと言った。

子どもは、芸の修行ができないなら帰る、家って何だろうと言った。

しかし、芸人はやはり家が欲しかった。

代わりに芸人はまたロマンを持つことにした。

ゲッパ君の足もなかなか若いもので、一息に静岡市まで辿り着いた。テントを張るのに良い場所が無く、いつもより長時間こいだ。道の駅があり、そこにゲッパ君と同じようなテントがあった。

ゲッパ君、助かったと自分もテントを張った。道の駅は旅人たちの宿らしい。

「明日は雨らしいですから、そこにテントを張っていたら困りますよ」

ゲッパ君より少し年下くらいの疲れた顔をした青年が言った。

「ありがとうございます」

それぎり青年は踵を返して自分のテントに向かい、会話は途切れてしまった。

ゲッパ君、寂しい気もしたがどうも話がまったくかみ合いそうに無かった。煙草を吸って近寄り易いようにしていても全く近寄ってこなかった。

バイクが一台やってきて、屋根の下に寝袋を広げた。やはりこの青年もゲッパ君には若く見えた。

多分、自転車に乗ってるやつらってのは言うなれば自転車オタクなんだ。多分、僕よりもずっと遠くまで旅しているんだろう。でも、それは僕や友達が一生懸命受験勉強したのと同じようなものなんだろう。つまり、進学校に入ったから勉強したみたいに、自転車部か何かに入っているからこいでいるだけなんだろう。だから、全く話せないのだろう。まあ、僕も知らない人に話しかけるほどアクティブでも無いんだけどさ。

でも、あのバイク少年には話しかけてみようと思うんだ。だって、バイクってカッコいいんだもの。チャリ少年のチャリもカッコいいんだけど、きっとバイク少年はバイク部なんか入ってないだろうし、ロクな人間さ。お、歯ブラシ持ってトイレに入って行った、チャンスだ。僕も歯ブラシ持って話しかけてやろうじゃないか。

うん、なかなか、まともそうな少年だ。体から同じにおいもするし、これは良いやつだろう。でも、こうして歯ブラシ持ってトイレで並んだところで話しかけたらゲイと勘違いされないだろうか。まあ、良いや。どこから来たの、なんて話し掛ければ、きっと岡山からチャリってところで僕を尊敬するだろう。

え、博多？

え、北海道まで行って来たの？

え、もう三十日目？

テント無し？

いやあ、凄すぎですね。参りました。

そんなに北海道は面白いんですか、ライダーズハウス、チャリでも良いんですか、へえ、そんなに安く泊まれるんですか、スーパーの魚も美味しいですか、へえ。

いやあ、良いやつにはかなわないな。やっぱり良いやつは煙草を吸うよね。

朝、道の駅に来た人々はゲッパ君のテントを見て首をかしげ、見て見ぬ振りをし、その向こうでバイクの横で寝袋に入り転がっている少年を見てその場を離れた。他のテントはもう無い。ゲッパ君は昨日飲みすぎたウイスキーのせいで久しぶりの遅い朝を迎えた。遅いと言っても七時だ

から十分普通のゲッパ君より早い。バイク少年は旅慣れているから二度寝ぐらい平気です。

「おはよーございます」

ゲッパ君が起きて歯を磨いていると、バイク少年もやって来た。

「おはよー」

「今日はどこまで行くつもりなんすか？」

「箱根を越えたいんだけどね。チャリだから厳しいんだよね」

「バイクでも厳しかったですよ」

「そっちは？」

「名古屋か、京都か。名古屋城が良い城かどうかですかね。名古屋城は再建してるし、どっちでも良いんですけどね。あとは雨次第かな。何とか振らなけりゃ良いんですけどね」

シャカシャカと歯を磨きながら会話は続く。二人でベンチに腰掛け、煙草に珈琲しながら、バイク少年は城と歴史について語り出した。くたびれたゲッパ君の頭にはほとんど内容は入ってこなかったが、良い顔をして話す少年だと思った。二人で、自転車とバイクを並べて愛車の写真を撮った。カメラマンはいないから、道の駅の前に自転車とバイクが並んでいるだけの写真だった。

ゲッパ君がテントをたたんでいると、バイク少年は律儀に挨拶しにやってきた。

「じゃあ、自分行きます。また、どこかで会いましょう」

「うん、じゃ、またどこかで」

バイク少年が出発すると、ゲッパ君に疲労がどっさりやって来た。

「なーに、北海道に比べればまだまだ楽勝ですよ」

ゲッパ君は水を飲んで自転車をこぐ。

箱根の山には山賊が出る。

大昔の話だと笑うなかれ、出るものは出るのだよ。

とにかく、箱根に挑むからには越えねばならない。山の上で夜を迎えるなんてことだけは勘弁してもらわねばならない。地元のチャリオっさんの案内のおかげで二時前に箱根のふもとまで来れた。おっさんのくせに良いペースでこぐもんだからこっちは息切れの上、小雨で富士山は見れなかったが、これなら箱根を越せる。ありがとうチャリオっさん。帰ってお金が貯まったら僕もビンディングペダルを付けてみるよ。

とにかく、山賊が出るのだ。急がねば。まあ、日没まで五時間もあるし、雨も止んで、下りは楽なんだから何とかなるさ。うちの近所の福山に毛が生えたようなものでしょう。

ほら、意外と緩い坂じゃないの。

ふー、あのカーブまで行ったら少し休憩しようかな。

いやいや、こんなところでジュースなんか買いませんよ。僕をなめちゃあいけないよ。

はー、あといくつカーブあるの？

いや、もう勘弁してくださいよ。

お、何て頭の良い狡賢い自販機だ。コーラコーラ。

いやあ、霧って、そんなの無しでしょ。

ごめんなさい。でも、引き返したら二度と登れないですよ。

城址？ そんなもの知らないよ。

本当、ごめんなさい。神様ごめんなさい。

ゲッパ君、十回以上大声上げながらも霧の箱根峠を無事に日没までに登り切り、頂上の道の駅へ。霧のせいで体がべたべたする。

しかし、霧は引かない上に、下りの神奈川方面には歩道が無い。車にはねられること間違いない。売店でご飯代わりに板チョコを買うと、雨が降って来た。

「もしもーし、元気ー？」

ゲッパ君、数少ない女友達から電話が掛かって来て少しばかり元気を出す。

「元気は無いけど、健康だよ」

「東京もう着きそう？」

「明日には着きたいけど、霧のせいで今夜は箱根の山の上で野宿だよ」

「え、野宿なの？ 凄いけど、大丈夫なの？」

「寝てたら朝が来るんじゃないかな。山賊さえ出なければ」

「山賊？」

「そうだよ、箱根の山には山賊が出るんだよ」

「……おい、嘘ばかり教えるな」

笛山君が出て来る。

「ああ、一緒にいたの。オレも彼女欲しいよ、箱根を一緒に越えてくれる彼女」

「そんなのおらん」

「いや、東京から帰ったらオレには凄いモテオーラが出るからできるよ。彼女なんて牧場の牛のように大量にできるよ」

「……できると良いな。ま、また香川にもチャリで来いよ。オレが卒業するまでにさ」

彼女に替わる。

電話が終わっても霧は引かない。多目的トイレで電源を確保し充電をする。流しの下の板を外すと水道のセンサー用の電源があることをバイク少年に昨夜教えてもらった。

「多目的のトイレなんだから、勿論利用しても良いに決まっていますよ」

バイク少年、律儀なくせにその辺は図々しかった。

電話で心が温まるのはどういう理由だろう。電話なんかつながっていても、何ものりゃしない。せめて有線の電話ならまだ辿っていけば人に会える気もする。でも、携帯じゃ駄目だ。電波さえあれば無人島でもつながる。実際のところ僕は一人ぼっちなのだ。でも、不思議と元気が出る。

ん、何だ。盗賊注意？

いや、山賊なんてアメリカさんに守ってもらっている今日の平和な日本に出るわけじゃないじゃないですか。そんな子ども騙しみたいな張り紙信じませんよ。

え、金髪の若者二人組の強盗？ 朝の五時前？ 小田原警察？

無理してでも、下山しようか。旅館に泊まるか、いや、箱根は高いし、土曜の夜のこの時間じゃ厳しいな。参ったな。でも、雨もかなり降り始めたし。トイレにいれば安全かな。でも、臭いよ。僕も臭いけど、この臭さは多分病気になっちゃう種類の臭さだよ。寝るまではここにしようか。

それにしても、山の上は寒い。母さんが金をくれたし、温かい飲み物でも飲もうかな。

ああ、何だか泣きそうだよ。死にはしなくても本当に怖いよ。子どもの時以来の本気の涙が出てきたよ。大人になったせいか泣き声は出ないけど、とっても熱い涙が出てきたよ。昔、大好きな女の子と別れる時さえ一滴も出なかった涙が、温かいココアに押し出されるみたいにぼろぼろ出てくるよ。

あれ？ チャリ？ 人が乗ってる。金髪じゃない。何だ目がおかしくなってしまったのか？

雨が降りしきる中、ゲッパ君のいる屋根の下に青年が自転車でやって来た。

「あー、もうこんな山いやだいやだ」

「あ、どうも」

ゲッパ君、涙をびたりと止めて青年を出迎えた。

自転車には『大阪—東京』と書かれた画用紙が張られている。

「いや、どうも、人がいて助かった」

「こちらこそ、山の上で一人はヤバイと思ってたところなんです」

話して行くとやはりこの青年もゲッパ君よりも二歳若い。たったの二歳だが、ゲッパ君には妙に若く感じる。

「いや、雨ぐらいへっちゃらだと思ってたんすよ、自分、体育会系なんで」

ゲッパ君を馬鹿とするなら、この大阪東京少年は大馬鹿だ。

「雨じゃなくてもこの霧は危なすぎるよ。追突されるよ」

「いや、自分、高校の時はバスケットばかりやってたし楽勝かなって思って」

「へー、僕は文化部の幽霊部員だからねえ、まあ、それでも危ないよ。明るくなるまで待つ方が得策ってものだよ。そんなにバリバリ部活やってたんだ」

「はい、うちの高校って全寮制だったんですけど、引きこもりのいじめられっ子六割に、ヤンキー三割に、スポーツ推薦一割だったんですけど、自分はその一割だったんですよ」

大阪東京君はよく喋る。

「まあ、面白い学校でヤンキーも同じ釜の飯を食っていると引きこもりたちと仲良くなっていくんです。それで、妙な輪ができるわけです。確かによく考えたらヤンキーも引きこもりも外見を剥がせばよく似たもんなんですよ。だって、学校の中ではじかれて突っ張るか、引きこもるかの違いじゃないですか。まあ、悪い連中じゃないし、面白いんですけど、一緒に傷舐めあっててもいけないからスポーツ組は頑張るわけですよ。そしたら、根性も付きますし、何だこんな坂ぐらいつてなもんで登り始めたら、駄目ですわ。こんな坂アホですよ。馬鹿ですよ。やっとなれませんかよ。何回もチクショーンなんて叫びましたよ。でも、そしたら人が上にいるでしょ、本当助かりましたよ」

本当に延々と喋る。

「田舎に泊まろうってあるじゃないですか。あれって本当かなって思って、いや、自分、富山の方まわって東京まで行っての帰りなんですけど、いや、あっちも楽しかったっすよ、人が良くて、大阪から来たなんて行ったら蕎麦屋のおっさんがおごってくれたりして、それで、調子に乗って田舎に泊まろうとしたんですけどね、まあ、やっぱりテレビなんてヤラセですよ、一軒目で無視、それでも次だ、丁寧に断られたり、お茶だけ出してもらったり、まあ、とにかく二十軒行ったところで諦めましたよ」

「パンクしたときがヤバくて、いや、自分、チャリなんて何も知らないもんだから、これもネットで二万円で買ったやつなんですけど、パンクが直せないわけですよ。でも、夜で、近くに自転車屋も無いわけです。車屋が偶然あって、もう閉めかけてるんですけど、頼んでみたら一時間かけて直してくれましたよ。いや、本当に田舎ってあったかい」

ゲッパ君「へー」「ほー」と相槌を打っていると、大阪東京君の電話が鳴り出した。

「え、こっちにいるの？ いや、一緒には帰らないよ。え、ご飯？ まあ、良いけど、箱根の上にいるよ。え、来るの？ ああ、はい」電話を切る。

「すいません、うちの親って過保護でして、何か近くまで家族で来てから飯一緒に行こうって言われまして。ああ、大丈夫っす。飯食ったら帰ってきますよ。酒いります？ 買ってきますよ」

あれやこれやと、大阪東京君はまた話し続けて家族が迎えに来た。太った裕福そうな母親によく似た妹に、弟。

「じゃ、行ってくるっす。先に寝ちゃ駄目ですよ」

正に嵐のように大阪東京君は自転車だけ残して行ってしまった。改めて残された自転車を見ているが、素人に毛の生えたゲッパ君でも、確かに安物の見かけだけの走らない自転車だと分かる。

ゲッパ君、今度は一人と言えども、心強い。張り紙によれば山賊は明け方に出るんだから、それまでには戻って来るだろう。

寒さを凌ぐため便利なくさい多目的トイレに入る。雨は降り止まない。

しかし、トイレにいてもすることは無い。また、飲み物を買おうかと出て来るとまた雨の中を自転車がやってくる。温かいココアのおかげで意識もはっきりしている。今度も目の錯覚では無い。

今度は痩せたおっさんだった。

「どうも」

おっさんは抑揚無くゲッパ君に声をかけた。顔が老けていて、疲れているだけなのか泣き顔なのか分からない。

「はあ、どうも」

「いや、雨の中はやっぱり無理ですね。人がいて良かった」

勿論、箱根峠、夜に人がいるなど稀の中の稀。

「しかし、なぜこんな雨の中を？」

「いやあ、休暇の間に東京まで自転車こごうと思って出たんは良いんですけどね、休暇が四日しかないから眠らずにこいでるんですわ。眠らなかつたら二日ぐらいで着くだろうと思ひまして」

「いや、二日で東京まではちょっと難しいでしょう」

「行ける気がしたんですけどね」

「社会人でそういう無茶な自転車する人って珍しいですよ」

「え？ そうなんですか？ 前回は名古屋から鈴鹿越えて京都までママチャリで行けたもんですから」

ゲッパ君、自分より馬鹿が二人もいると心強い。実際には、馬鹿と一緒にいると危険な目に遭うだけだから、賢い人間という方が良い。しかし、賢い人間はこんなところには来ない。それなら周りが自分より馬鹿が良い。馬鹿の方が先に危険をこうむってくれる。

しかし、仮に危険、つまり山賊が来ても、ゲッパ君は逃げない。なぜなら、まず逃げれないから。それから、人に優しくありたいから。

大阪東京少年は律儀に缶チューハイを持って帰ってくる。

箱根の峠で小さな宴会が開かれる。おっさんは下戸だから飲まぬ。大阪東京君は大学に入りたてのチューハイ飲み、ゲッパ君はノブコフからもらったアーリータイムズ。大阪東京君がよく喋る。ゲッパ君もおっさんも眠いからほとんど聞いちゃいない。要は日本海側の町は素敵ってことと、何か部活でも入ろうかしらん、体育会系は難儀ですよ、バイトもありますし、飲みサークルなんて良いですよ、股広げてくれる女の子もいっぱいいますし、ただ、あいつら馬鹿だから、一人じゃ何もできん馬鹿だから、と。

不意に駐車場に車が止まって裕福そうなおっさんが自販機の前にやって来る。大阪東京君のお母さんのように太ってはいないが、裕福な人間ってのはどこか同じ雰囲気がある。ゲッパ君にはその雰囲気が腹が立つ。

裕福おっさん、ゲッパ君のチャリを眺める。ゲッパ君チャリを守りに行く。

「ああ、ごめん、君のかな？ ロードでロングライドしてるの？」

「そうです。長距離の旅用の自転車を買うお金も無かつたし、ちょっと思い入れのあるチャリでして」

裕福おっさん、缶コーヒ一片手にそのまま宴会に入りこんでくる。

「やっぱりチャリが良いですよ、オレのは安物だけど」

「いや、安物でここまで来るってのが凄いよ」

「ロードで来るのも大したもんだけど、ビンディングははめないの？」

「いや、やっぱりお金なくて。レースに出る予定も無いですし」

「え、ビンディングって何ですか？」

不眠不休おっさんは端で三角座りで丸まって動かない。

高校は坂の上にあります。

結構な坂でしたから、ほとんどの生徒が自転車を押して坂を上がるんですけど、なぜか私の学年の一部の連中は足を付かずに登りきろうとするわけです。最初はみんな根性なんですけど、一人がタイヤを細くするなんて改造をすると周りもいじりだすわけです。猛者が数人いて、段々足

を付かないぐらいは当然になってきて今度は速さですよ。優勝を目指すわけです。

ある日、インチキ野郎がスポーツ車なんて卑怯なものに乗ってくるわけですよ。誕生日に買ってもらったとのことで。まさか、一年に一回の誕生日を通学の、それも歩けば事足りるものを使うとはこっちも予想外でした。

次の週には私も貯めていたお年玉をみんなおろして買っていました。

スポーツ車になれば改造もやりたい放題です。ハンドルを切ってエンドバーを付けるなんてのは当然で、みんなお年玉だの、誕生日だの、おばあさんにもらった小遣いだの、何でも突っ込んで大切な自転車が壊れるかどうかギリギリのところまで改造してくるんですね。それでも、体育会系のやつらの間では改造御法度、信ずるのは己の肉体のみ、なんてのもあって、あいつらはマチャリでも果敢に戦ってくるわけです。普通に歩いて押す生徒からはアホか、みたいな目で見られるわけですけど、熱い戦いが毎朝繰り広げられました。

二年になったら、新入生で金持ちがいたわけですけど、そいつがピカピカのプジョーのドロップハンドルのロードバイクなんていう核兵器みたいな自転車で来るわけですよ。実際は、坂を登るにはタイヤの径は小さく、前の変則は三段の安いギアの方が良いんですけど、まあ、かっこいいわけです。

それで、プジョーは我々の憧れの的だったんですが、絶対にみんな口には出しません。金持ちに負けるわけには行かないのだ、それでプジョーにだけには絶対誰も負けませんでした。プジョーの方は実のところ我々の尊敬のまなざしには気付いていて、それが気持ち良いわけで、負けようが構わないようでしたが。

修学旅行の一週間前に戦士の一人が下見に行こうなんて言いだして一日かけて鎌倉まで行ったりもしました。

大学に入っても始めの内はチャリ熱もあったんですけど、欲しいものもあるし、何より、戦う坂に戦う友もいない。それで、だんだんとチャリのことなんて忘れて行ったんですよ。

しかし、大学を出て働き出して十年もしたある日、いつものように車で出勤していると、会社の前のゴミ捨て場にボロボロのロードバイクが捨ててありました。懐かしいな、なんて思って車を止めて見てみると、プジョーではないですか。その頃には車のプジョーに乗っているわけですが、もうプジョーは自転車は作ってないと聞いていましたから、喜びましたよ。

そんなわけで良い年こいて自転車をまた始めたというわけです。

それにしたって、どうしてみんな「また、どこかで」って言うんだらう。絶対にとまでは言わなくても、ほとんど会う可能性なんて無いのに。裕福おっさんまで、「またどこかで会ったら」なんて言って、プジョーのスポーツカーに乗って帰って行ったし。

チャリなんて乗ってたらみんな頭がおかしくなっちゃうのかな。

僕までおかしくなっちゃ困るから、七曲がりの坂を降りて、箱根の湯に入って、ふもとで牛丼を二杯食った。久々の湯船で気持ち良すぎて体が溶けるかと思ったら、垢がぼろぼろ出て来て気まずかった。行き違いにせっせと本気のチャリやマラソンランナーたちが坂を登って行く。

どうして自転車なんてこいでいるんだらうか。とりあえず、水を飲んで考えてみようじゃないか。

噂に聞いている湘南の砂浜はヤンキー兄ちゃんに埋め尽くされてサーフボードがつるつる滑っている。こいつらきっと毎日ここに来て同じように過ごしているんだらうな。アホじゃなからうか。でも、何となく分かる。多分、自分の町が好きなんだらう。だから、毎日自分の町の一番綺麗な場所で、同じ町で育った友と一緒に遊ぶんだらう。

僕だってそうありたいんだけどね。昔の友達と焚き火して、読んだ本の感想なんて言い合って、珈琲を延々飲んで、ロクでもないだのかんだの、ちょっと彼女なんて作ったりして。倉敷にいて。何故だかみんなどこかに行くんだよ。かくいう僕もどこかに行こうとしてる。

ヤンキー兄ちゃんよ、どうやって君らはそんな日々を過ごしているんだい。僕にも教えておくれよ。愛してるだのなんだの歌わなくても分かっているから、どうしたらそうやって毎日ここに来れるんだい。毎日来るのは若いやつだけって？ そうかもしれないね。でも、君らを羨ましく思うんだよ。波と風を愛せって言われても僕の町には波どころか海は無いし、夕方になると風ぐんだよ。

あと、サイクリングロードにサーフボードは凄く邪魔なんだよ。

ああ、このまま自転車をこいでいたら僕はいつまでも自転車の上にいられる、当たり前だけども。だけど、もうあと何回か水を飲んでしまえばゴールなんだ。

浮世君は駅に向かっていった。

浮世君、映画を作る人である。岡山で転々と地元の映像会社、サークルを渡り歩いて、今年の頭に東京に出てきた。ゲッパ君評によれば浮世君は地に足付けて夢を見る人である。

「駅に着いたので迎えに来て下さい」

偶然近所のコンビニに来たわけじゃあるまいし、そんな短いメール一通だけじゃなく、もう少し喜びの電話でもしてくれば良さそうなものだがね、何ぞ良い映画のネタになるかな、浮世君の足は軽い。

着いてみると、確かにゲッパ君が半ズボンでコンビニの前に座り込んでいる。隣には自転車にパンパンの荷物がある。

「やあ、本当にいるね。何だか面白いな。とりあえず、おめでとう」

「何がおめでたいかよく分からないけど、ありがとう」

「とりあえず、どうする？」

「水」

「飲んでるじゃん」

「今日飛ばしすぎたから。水飲めば人間元気になる。ご飯食べて、あとは水さえ飲んでればいくらでも人間って動ける」

「そうか、いや、それにしてもだよ、初めて東京に来る人間はもう少しマシな格好をするもんだよ。高校の体操服の半ズボンに何だよその赤のジャージ？ ってか、くっさいな」

浮世君、ゲッパ君についてコンビニに入りながら聞く。

「体操服は途中で捨てても良いようにだよ。案外、着心地良くて結局最後まで愛用してるけどさ。上はサイクルジャージってやつさ。自転車専用だぜ。一番安物だけど、公園のトイレで洗って手で絞るだけで次の朝には乾いている優れものだぜ。ってか、お前も何だよその髪、まあ、オレが言えることでも無いけど伸ばし放題のぼさぼさじゃん」

「映画人、文化人ってやつですから」

浮世君は大声で笑いながら言う。

「そういえば、ヤマンボーは？ 会ってないの？」

「まあ、なかなか会わないな。っていうか、お前経由の友達だろ、オレは直接は関係無いし。呼んでみるか。新しいムービー上がったから一緒に見ようぜ。ってか泊まる場所はどこの？」

ゲッパ君、笑って浮世君を指差す。

「はあ？ まあ、良いよ。文化人だから、面白いやつには優しくしてやるよ。とりあえず、風呂入れ」

東京のベッドタウンを高校の体操服の半ズボンと髪ボサボサの二人が歩く。

ヤマンボーは相変わらずお洒落だったし、浮世君は相変わらず僕に優しくかった。

でも、結局、東京なんてのは僕の幻想だったわけだ。

橋を渡って大田区なんて文字が見えた時には高々とガッツポーズをしたものの、同じ国で同じような食べ物を食べて同じような教育を受けて生きている、数は多くとも規模は大きくとも同じような街だ。

だから、倉敷にいた時と同じように、たっぷり寝て、ヤマンボーと神社に行って、浮世君の映画の話聞いて、ジャズを聴きながら珈琲を飲んだ。二人とも元気にしていたし、何かしらこっちで頑張っているらしい。

浮世君は撮影が終わって気が緩んでいるらしくよく眠った。僕も一緒に眠るかと思ったけど、せっかくの東京なのでぶらぶらと歩いてみた。ヤマンボーの働く百貨店の中のアパレルに行ってみようと思ったら、働いているのは浦和だそうで、僕は一人で宛ても無く散歩して珈琲を飲んだ。

ヤマンボーは週に一回の仕事の休みを神社に付き合ってくれた。旅の途中で思った神様を探してみようかなんて思った。でも、ゴールだからって神様なんていなかった。神社でそんなことを思うのも罰当たりかもしれないけど。探し方が悪かったのか、もしかすると一号線の起点の日本

橋にいたのか。いや、そういう細かい場所が大事なわけじゃない。上手くは言えないけど、とにかく僕は間違いなくゴールしたし、ゴールには神様はいなかった。

ヤマンボーの仕事の日は倉敷にいるのと同じようにジャズ喫茶に珈琲を飲みに行った。東京にはまだジャズ喫茶がいくつかあった。でも、倉敷のジャズ喫茶の方がレコードの枚数は多かった。

何も昔と変わらない。あの頃は、ヤマンボーは甲子園に向けて練習をしていて、。甲子園が終わった後の短い休みをヤマンボーは僕とよく神社に行ってくれた。浮世君は絵を描いているか、粘土をこねていて、たまに僕を呼び出したと思ったら公園で缶コーヒーを買って二時間くらいぼーっとしていた。僕は、受験勉強しながらも、飽きるとぶらぶらよく歩いて、お金があれば味もよく分かっていない珈琲なんて飲んでいた。あ、今は珈琲の味は少しだけ分かるようになったし、ジャズのレコードもほんの少しだけコレクションがある。

東京は幻想だった。僕の友達たちは昔よりもちょっと大人の難しいフィールドで戦って、昔と同じように僕に優しくかった。

幻想だってことにガッカリもしたけど、何故だか安心した。二人が元気だったからってのもあるけど、もっと大きな何かに安心した。

母さんがくれたお金が無くなってバスのチケット代だけが財布に残ったところで浮世君に一番安い夜行バスのチケットを買ってもらった。

ゲッパ君、運転手に怒られながらも無理矢理自転車を押し込んで、バスに乗った。

浮世君にヤマンボー君は、やれやれ、世話のかかるやつが何とか無事に帰って行くよ、なんて話しながらゲッパ君を見送る。

ゲッパ君、かつては見送る側だった。地元に残っているいろんな友を見送り続けた。見送った後にとっても寂しく悲しくて泣いた。

だが、今はもう悲しくない。自分の足で来れる場所に友はいる。

バスは時間通りに発車した。二人の友達が見えなくなって、ゲッパ君は眠りに付く。夜行バスは車内灯を消して進んでいく。一週間かけて走った距離が乗っているだけで勝手に進んでいく。

琵琶湖の夢を見た。

琵琶湖の畔でゲッパ君は夕陽を見ている。そこにはまだ東京に着いていない自分がいた。

「東京なんて遠いところまで行けるんだろうか」

テントの中から弱気な声が聞こえる。

夕陽が沈んだ途端、琵琶湖が静かに揺れて流れ始めた。いつの間にか偉そうなねずみが一匹チーズをかじりながら横にいた。

「良いかい、ここに斬新な仮説がある」

ねずみは言い出した。

「知ってる。蟻が食いちぎったって仮説だろ。琵琶湖は流れていく」

「御名答。さて、この少年は自分の街に帰りたと言っている。わしはこの少年を琵琶湖ごと彼の町に返してやろうと思っている。琵琶湖の原理を利用すれば彼の友達もみんな故郷に帰れる。波と風もある」

僕は何も答えなかった。

ねずみはあごひげを撫でながらこちらを見て声を出さずに笑った。

「何、百里に行くものは九十里を半ばとするのさ。まだまだ、半分も来てないさ、十分倉敷に近いじゃないか、帰りたくなったら勝手に帰るさ、東京まで行くんだ」

テントの中から声がした。僕はねずみに言った。

「その仮説は世界を震撼させるだろうね。でも、結構。彼は彼の世界で立派にやるさ。蟻は死ぬし、僕らもいずれ死ぬだろう。生きるためにはいろんな悲しみもある。でも、ロクなことだっただけあるさ。僕だってロクに生きようとしてるんだ」

ねずみは満足したような表情で、琵琶湖に歩いていくと首に木の札を掲げると僕が東京まで乗ってきた自転車にまたがって振り返って言った。

「また、阿呆自転車に乗りたかったらいつでも呼んでおくれ。これは君の自転車さ」

木の札には『回送』と書かれている。

ねずみはそのまま湖の上を滑るようにして、月へと吸い込まれて行くように見えた。

テントが揺れ、中から煙草を吸おうと僕が出てこようとしている。

僕は、そそくさと立ち去る。

到着のアナウンスで目を覚ましカーテンをめくると、朝の見慣れた自分の町だった。携帯電話にメールが入っていた。

「おかえり、珈琲でも飲みに行こうか。給料が入ったんだ」

駅には土竜君が迎えに来てくれていた。

(了)